黄金律

——傘二題から——

明け方から降りはじめた雨が本格的になった八日、気象台は中国地方のつゆ入りを宣言した。丁度その日は、ゆかた祭ともいわれる圓隆寺の縁日、広島地方の初夏の夕べを楽しませてくれる「とうかさん」の初日に当たっていたが、今年もその日は雨にたたられてしまった。

申すまでもなく、つゆは六月初旬から七月中旬にかけて降り続く長雨をいうが、この季節、梅の実が熟して黄色に色づくところから黄梅の雨とも梅雨ともいう。そのおかげで、田植えができ秋の実りも約束されるというのであるから、鬱陶しくはあってもつゆには感謝しなければなるまい。

ところで、JRの方のお話しでは、忘れ物のトップは雨傘だとのことだが、特につゆ期には多いという。先日の新聞の投書欄にも忘れ物の傘のことが載っていた。

それは、JR宝塚線を利用している方の奥さんからのものだったが、ご主人が、お天気の好い日に傘を下げて帰ってきたので、どうしたの、こんな好い日に、と尋ねたところ、

三日前の雨の朝、駅に着いたのであわてて降りようとして傘を置き忘れてしまったが、今日、知らない人から「お宅の傘ではありませんか」と手渡してもらった。

というのである。恐らく、傘を渡された方は、よく同じ列車に乗り合わすそのご主人をご存知だったのでしょう。それにしても、いつまた会えるかわからないその方の、置き忘れの傘を、毎日持ち歩かれていたというそのやさしさには心打たれる。奥さんも、その温かい心遣いに感謝して筆をとられたに違いない。

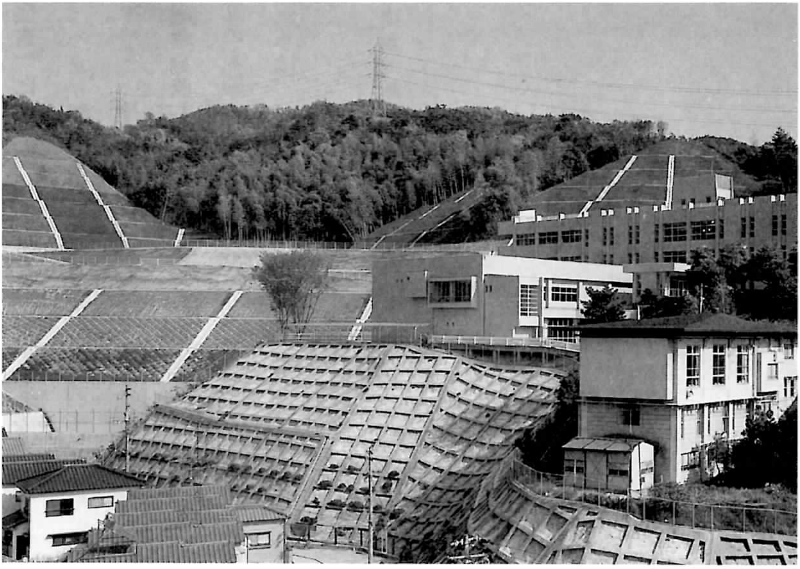
もう一つ。それは忘れ物の傘ではないが、富山県から所用で広島にお見えになったご夫妻からのものである。仕事を終えて市内見物に出かけたが、途中雨に降られ、原爆資料館を見たところで帰途についた。霧雨の中をタクシーを拾おうと舗道で待っていたところ、雨傘を差しかけて下さる方がある。突然のことで、それがどなたで、また、なぜ差しかけて下さったのかわからなかったが、実は、それは、信号待ちで車を止めていた方の善意だったのである。

女子短期大学の遠景

一見して旅人とわかる荷物を持った人が、霧雨にぬれながらタクシーを待っているのを見て、たとえ僅かな時間でもぬれないようにと、車から降りて雨傘を差しかけられたのであった。

このご夫妻が感動されたのは、いうまでもなく、この温かい善意でもある。信号機の赤が青に変る僅かの時間、それがたとえ三十秒という短い時間ではあっても、その旅人への温かいやさしい心遣いは、誰しもの心を打つであろう。

ところで、個人を尊重する現代社会にあって案ぜられるのは、自分を大切にする余り、他人を思いやる心を、どこかに置き忘れた者が多いということである。『聖書』に、「すべての人にせられんと思うことは、人にもまたその如くせよ。これは律法（おきて）なり」とある。ここにいうのは、「自分が他人からして欲しいと思うことは、先ず自分から他人にして差し上



天水の丘に建つ比治山

げよ」という程に解してよいと思うが、このように、『聖書』には、既に、他人を思いやる心をもって行うことの大切さを教えて、これが律法だといっているのである。つまり他人を思いやる温かい心で行うことは、時と所とを越えて永遠に通用する真理であり、人間行為の黄金律だといってもよいのである。先の投書の、傘の持ち主を捜して毎日持ち歩いた方や、信号待ちの僅かの時間に雨傘を差しかけた方に見られるように、温かい思いやりの心をもった人たちこそは、『聖書』の律法にかなった真の人間ということができるであろう。

人間は、申すまでもなく、生来善なる存在である。私たちは、このことを想い起こし、人間本来の姿に立ちかえって、善行を積み重ねたいと思う。

今はなお、黄梅の雨の降りそそぐつゆの季節。もしも街角で雨にぬれながら信号を待つ人を見かけたら、私もそっと雨傘を差しかけたいと思っている昨今である。

比治山女子短大新聞（昭・63・7・12）